

**朱 家雄**  
(Zhu Jiexiong)



華東師範大学教授

華東師範大学就学前及び特殊教育学院教授、教育部人文社会科学重点研究基地—華東師範大学基礎教育改革及び発展研究所研究員、博士課程指導教師、終身教授、華東師範大学就学前研究所所長。

現在、中国就学前教育研究会（国家一級学会）副理事長、学術委員会副主任、環太平洋地域就学前教育研究会（PECERA）中国大陸委員会主席の任にあり、国際的な就学前教育定期刊行物4誌の編集委員を務めている。

学術研究と教育の主な分野は、就学前教育の基本理論、幼稚園カリキュラム等。これまでに主宰した各種のテーマ研究は多項目にわたり、発表した著作・翻訳・教材は数十種類、論文は百本余り、相前後して省・部レベル以上から多数の賞や、國務院の特別助成金を受けている。

朱家雄学前教育研究：<http://www.zhu.jx.com/>

### 幼小接続についての考察

1990-1994年、UNICEFと中国教育部は「幼稚園と小学校の接続についての研究」という共同プログラムを実施し、幼稚園と小学校の接続の問題を解決するには、子どもの学習適応能力だけでなく、社会的適応力も改善する必要があることが分かった。その研究によると、子どもの学習と社会の適応能力に影響する要因として、子どもの自主性の問題が大きい。従って、子どもの自主性の育成は重視されるべきである。この研究は、幼稚園（「学前班」を含む）と小学校のカリキュラム改革に影響を及ぼしている。

それ以降の二十年間、幼稚園のカリキュラム改革は国主導から幼稚園主導になった。幼稚園のカリキュラムは、従来国家の規定によって設置された「言語」「体育」「音楽」「美術」「常識」「計算」から「言語」「科学」「社会」「芸術」「健康」になった。小学校低学年のカリキュラムの中には「道徳と生活」科目が組み入れられた。

幼児教育と小中学校教育改革は、教育実践上において幼稚園と小学校の接続問題の解決に一定の役割を果たした。しかし、幼稚園と小学校の接続の効果からみると、改革は広く応用できる普遍的な意義と結果をもたらさなかった。主に以下のことに現れている：多くの子どもが小学校に入っても適応できない問題、特に学業上の困難、に直面する；就学前教育機構は小学校化する傾向があり、特に幼稚園の年長組の後期にこの傾向が目立つ；小学校では「道徳と生活」が必須科目として見なされていないなど。

現在中国では「調和した社会の構築」が重視されており、教育の公平性と教育資源の均等化がまず解決されるべき問題となった。従って、幼小接続の問題を考える際も、解決すべき問題は「よりよくすること」よりは「なぜやるのか」、「どんなことをやるべきか」を考えるべきである。

幼児教育を受けるチャンスのない（または少ない）子どもたちにとっては、学習適応能力や社会適応能力を養うことは、必要なことではない。教師のレベルが低く、教師と幼児の割合がまだ低く、教育資源も足りない教育機関で、児童の生活経験に近い自発的探索活動を試みても接続の問題の根本は解決できない。